

2024年度成人科テキスト

月刊 「ぶどうの木」

8月号



わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。(ヨハネ14:27)

名前

目次

証し「成人科の恵み」	濱中孝雄兄	・・・ 1
解説・創世記②		・・・ 3
第18課「ヤコブの脱走」		・・・ 5
ショートメッセージ：田中由記子姉	聖書日課：工藤征治兄	
第19課「ペヌエルでの格闘」		・・・ 9
ショートメッセージ：郷健人兄	聖書日課：宇佐美典子姉	
第20課「ヤコブ、エサウとの再会」		・・・ 13
ショートメッセージ：栗山義重兄	聖書日課：渡部和子兄	
第21課「ヤコブのベテル帰還」		・・・ 17
ショートメッセージ：郷秀男兄	聖書日課：小沢敬一兄	

表紙イラスト：友納聖子姉

おしらせ

- 成人科は毎週日曜日 10：15～50 地下フェロシップホールにて行っています。ぜひご出席ください。
- ショートメッセージの動画は、教会ホームページからも視聴できます。上部メニューから「教会学校」をクリック→「成人科」をクリック
- ショートメッセージと聖書日課を、メールで受け取ることができます。ご希望の方は成人科奉仕者（ショートメッセージ、聖書日課の執筆者）にお声がけください。
- 「ぶどうの木」のボックスへの配布をご希望される方も、奉仕者までお知らせください。

向日葵

作詞・作曲 長沢 崇史

D G A D G D

かみさまがー くれ たこのいのちー すばらしいー かぞくにー すば
ひまわりをー よく見ーてごらんー ほらどこーか たいよう にー に

Em A D G A D

らしいともー いっだーてー えがおたやさずー たい
にて いないかいー ぼくたちもー 主だけ見上げてー イエス

G D Em A D

せつにー そだて てー くれ た このいのちー しお
さまにー に たもの にー なっ てー いきたいー

G D F# Bm

れて 枯ーれ果て たおれてしまっ てもー たね は きえず にー

Em A D F#m

またもういちど はなをさかせるー ー たいように向かい ます

Bm F#m G D Em A7 D A

くにそだつ そん なすがたを こころにうつし ぼくらもつよく 生き

Bm A G D Em A7 D

てー 行こう ただ かみさまを見上 てー ー ひまわりのようにー

証し「成人科の恵み」

濱中 孝雄

私が四十年ぶりに常盤台教会に帰ってきたときに、一番に気になったのは成人科の教会学校でした。それは青年会での聖書の学びと奉仕の業が私に大きな影響を与えたからです。聖書の学びと奉仕の業により、友だちになり仲間になり、兄弟姉妹になっていきました。そして永遠の兄弟姉妹へと。

常盤台教会に帰ってきて成人科で聖書を学んだとき、とても不思議な感覚におそわれました。エズラ、ネヘミヤ記を学んでいたからです。エズラ、ネヘミヤ記はバビロン捕囚から解放され、エルサレム神殿を再建し、エルサレム神殿で礼拝できる喜びを書いた歴史書です。私が四十年ぶりに常盤台教会に帰ってきた喜びと重なったのです。

「もしかしたら、神さまは私が常盤台教会に帰ってきたことを喜んでいらっしゃるのだろうか。」と思いました。

対面という言葉を知りましたが、対面の意味が私には解りませんでした。私はずっと普通に礼拝が行なわれていたと思っていました。コロナ禍により教会堂での礼拝ができなかったことを知りびっくりしました。対面で礼拝できる喜びと、私の喜びが重なったのですね。私たちは、エズラ、ネヘミヤ記から対面で礼拝できる喜びを学んでいたのですね。

私がもうひとつびっくりしたのは「ぶどうの木」を書いている人たちの信仰です。

罪を犯したアダムとカインに対する神さまの言葉。

「お前はどこにいるのか。」

私には神さまの怒り、裁きにしか聞えません。それを神さまの優しさ、慈しみにみちた言葉と表現しているのです。どの様にしたらこのような信仰が持てるのでしょうか。いつもいつも罪を犯しては神さまから隠れようとしている自分。まだまだ聖書の学びが足りない自分を思います。私は「ぶどうの木」を読むたびに、いつも打ちのめされる思いがします

今は成人科の教会学校に参加できることを喜びと共に感謝しています。

解説・創世記②

【聖書の内容】

聖書は旧約聖書の創世記(世界の始まり)から新約聖書の黙示録(世界の終わり)に至るまでの救いの歴史と言えます。

これは一言で「救いの歴史」であると表現することができます。

アダムとエバに始まる人類の生き様、アブラハムに始まるイスラエルの歴史、すなわち出エジプト、荒野の放浪、士師の時代、ダビデやソロモンによる王国のはじまり、北王国、南王国の滅亡、捕囚・帰還が旧約聖書に書かれています。

新約聖書の時代に入り、キリストの誕生、十字架、復活、教会の誕生や活動、キリストの再臨と終末へと救いの道が書かれています。

聖書全体はキリストを証言し、証ししているということです。創世記は、直接「イエス・キリスト」という言葉は用いていませんが、救い主を指し示しています。黙示録は、この方による救いの完成を指し示し、証ししています。

ヨハネ福音書 5:39

あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。
ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。

【聖書と宗教】

・旧約聖書だけの宗教

ユダヤ教は、今もなお旧約聖書のみを正典としています。つまり新約聖書を持たない宗教がユダヤ教です。旧約聖書がイエス・キリストを証言していることを受け入れてはいません。彼らはひたすら救い主が来られるのを待ち望んでいます。

・新約聖書だけの宗教

自由主義のキリスト教のなかには、旧約聖書に登場するイスラエルは滅びてしまったので、旧約聖書全体に価値を見出そうとしない人たちがいます。

- ・ユダヤ教は旧約聖書のみを正典とします。
- ・ユダヤ教は旧約聖書を「法」を軸として理解します。
- ・キリスト教は旧約聖書を「救済史」として理解します。

創世記から申命記までのモーセ五書を人間と神の側を焦点に考察してみますと下記のようにも表すことができます。

人間の側 滅び⇒贖い⇒交わり⇒歩み⇒目的地に向かう旅路

神の側 神の主権⇒神の力⇒神の聖⇒神の寛容と厳しさ⇒神の愛

【ヨセフから教会のリーダー像を学ぶ・ひとつの事例として】

私たちの常盤台教会は、相互牧会を目指す「グルーピング」の話し合いが続けられています。グループにはリーダーが必要とされていますが、そのリーダー像にはグループに求められる目的により違いもあると思います。

9月は創世記のヨセフ物語を読み進めますが、ヨセフから教会のリーダー像としてのひとつのモデルを示されます。

大切な信徒リーダー(仮称)のモデルとして創世記39章のヨセフの姿に倣います。

- ・ポティファルの家が祝福された理由・・・「ヨセフのゆえに祝福された」
- ・ヨセフが主人に「ことのほか愛され」を他の表現で言うと・・・「信頼された」
- ・ヨセフを雇った主人は信頼をどのように表したか・・・「全財産をゆだねた」
- ・ヨセフの日常生活態度を挙げるなら・・・「小さなことにも忠実だった」
- ・ヨセフの幸運な人生の原因は・・・「主がヨセフと共におられたから」
- ・ヨセフの主人はヨセフが主と共にいる事をどうして知り得たか・・・「ヨセフの誠実性、専門性」
- ・ヨセフの獄中生活から見えてくることは・・・「一貫性のある人生を歩んだ」
- ・ヨセフがポティファルの妻の誘惑を拒んだ決定的な理由とは・・・「神を意識した」
- ・ヨセフが夢の説きあかしの時、彼の答えから感じ取れる事とは・・・「すべてに神の名を挙げる」

創世記40:8

「我々は夢を見たのだが、それを解き明かしてくれる人がいない」と二人は答えた。ヨセフは、「解き明かしは神がなさることではありませんか。どうかわたしに話してみてください」と言った。

創世記41:16

ヨセフはファラオに答えた。「わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです。」

信徒リーダー(仮称)としてのモデルであるヨセフの生き方をまとめてみましょう。

- 1)ヨセフはどんな小さな事にも忠実だった。
- 2)彼は置かれた場所の上役の信頼を得た。
- 3)彼は任された全ての事を一貫した態度で行った。
- 4)彼は誘惑に対して、主の御前に立つ姿勢で勝利した。
- 5)彼は機会が与えられる都度に、主について話し、証しした。
- 6)彼は主を表わす生き方で未信者にも証しした。
- 7)彼は最終的に自分の周辺や世の中の祝福となった。

参考図書

「新聖書購解シリーズ 創世記」2002年 いのちのことば社

「旧約聖書概論」石原潔 2005年 日本ホーリネス教団

「小教会小牧会第三版」2019年 常盤台教会教育委員会

「新聖書ハンドブック」ヘンリー・H・ハーレイ 2023年 いのちのことば社

(文責・郷秀男)

第18課 ヤコブの脱走

聖書箇所：創世記31章1～13節（参照31章14～54節）

主題聖句：わたしはベテルの神である。かつてあなたは、そこに記念碑を立てて油を注ぎ、わたしに誓願を立てたではないか。さあ、今すぐこの土地を出て、あなたの故郷に帰りなさい。（13節）



1ヤコブは、ラバンの息子たちが、「ヤコブは我々の父のものを全部奪ってしまった。父のものをごまかして、あの富を築き上げたのだ」と言っているのを耳にした。2また、ラバンの態度を見ると、確かに以前とは変わっていた。3主はヤコブに言われた。

「あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる。」

4ヤコブは人をやって、ラケルとレアを家畜の群れがいる野原に呼び寄せて、5言った。「最近、気づいたのだが、あなたたちのお父さんは、わたしに対して以前とは態度が変わった。しかし、わたしの父の神は、ずっとわたしと共にいてくださった。6あなたたちも知っているように、わたしは全力を尽くしてあなたたちのお父さんのもとで働いてきたのに、7わたしをだまして、わたしの報酬を十回も変えた。しかし、神はわたしに害を加えることをお許しにならなかった。8お父さんが、『ぶちのものがお前の報酬だ』と言えば、群れはみなぶちのものを産むし、『縞のものがお前の報酬だ』と言えば、群れはみな縞のものを産んだ。9神はあなたたちのお父さんの家畜を取り上げて、わたしにお与えになったのだ。

10群れの発情期のころのことだが、夢の中でわたしが目を上げて見ると、雌山羊の群れとつがっている雄山羊は縞とぶちとまだらのものばかりだった。11そのとき、夢の中で神の御使いが、『ヤコブよ』と言われたので、『はい』と答えると、12こう言われた。『目を上げて見なさい。雌山羊の群れとつがっている雄山羊はみな、縞とぶちとまだらのものだけだ。ラバンのあなたに対する仕打ちは、すべてわたしには分かっている。13わたしはベテルの神である。かつてあなたは、そこに記念碑を立てて油を注ぎ、わたしに誓願を立てたではないか。さあ、今すぐこの土地を出て、あなたの故郷に帰りなさい。』



先週の聖書箇所は、父イサクをだまして、兄エサウから長子の特権と祝福を奪ったヤコブが、エサウの激しい怒りから逃れるために、母リベカの勧めで、親族がいるハランへと向かうところでした。旅の途中、不安の中にいたヤコブに神さまは現れ、「わたしはあなたと共にいる」「必ずこの土地に連れ帰る」（28:15）と約束をしてくださいました。その場所にヤコブは石を記念碑として立て、先端に油を注いで、ベテルと名付け、誓願を立てたのでした。

一人でハランへと向かったヤコブは、母の兄ラバンのもとに身を寄せます。ラバンの娘ラケルとの結婚を望んだヤコブは、ラバンのもとで7年間働きます。いわゆる結納金代わりのようなものです。しかし、ヤコブはラバンに騙され、姉レアと結婚させられます。ラケルとの結婚も認められたものの、ヤコブは更に7年間働かなければなりません。ある時、ヤコブは故郷に帰らせてほしいとラバンに願い出ます。ヤコブの働きにより、ラバンの家の家畜や財産は大きく増えたので、ラバンはヤコブを手放すのが惜しくなり、報酬をやるからここに残らないかと持ち掛けます。ヤコブは、羊や山羊の中で、ぶちやまだらや縞のものを報酬としてほしいと言います。それらは、あまり生まれることがないので、報酬としてやっても惜しくないと言います。しかし、「あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（28:15）と約束した神さまの恵みにより、また、長く家畜の世話をし得た知恵により、ヤコブは、自分の財産を増やして裕福になっていきました。

ラバンの息子たちは、「ヤコブは我々の父のものを全部奪ってしまった。父のものをごまかして、あの富を築き上げたのだ」と嫉妬しました。また、ラバンの態度も以前とは明らかに変わっていました。たった一人で逃げてきたヤコブを受け入れた時は、哀れに思い、また、働き手として使えると思ったのかもしれませんが、自分の支配下にいたヤコブが、どんどん家畜を殖やして裕福になっていくのを見ると、妬ましくなったのでしょう。確かに、ヤコブは自分の知識を使って、ラバンの家畜は増えないように、自分の家畜だけが増えるようにしました。しかし、ヤコブの報酬が増えないように、ラバンも正しくないことをしていたので、ヤコブだけを責めることはできないと思います。

ラバンのもとで20年間働いたヤコブに対し、神さまは、「ラバンのあなたに対する仕打ちは、すべてわたしには分かっている。(中略) さあ、今すぐこの土地を出て、あなたの故郷に帰りなさい。」と語りかけます。ヤコブはすぐにラケルとレアにこのことを伝えました。二人とも父親ではなく、ヤコブとヤコブの信じる神さまを選んだので、ヤコブとラケルとレア、子どもたちはラバンに見つからないように出発しました。

ヤコブが逃げたことにラバンが気づいたのは3日後のことでした。ラバンは驚き、また、娘や孫たちに別れを言うこともできなかったことに悲しみだけでなく、怒りすら覚え、ヤコブたちを追いかけてますが、神さまはラバンに対して、「ヤコブを一切非難せぬよう、良く心に留めておきなさい。」(31:24)と言われます。

神さまの守りにより、ラバンとヤコブは暴力ではなく、対話によって、お互いを認め、互いに相手の領域には入らない契約を結びます。「必ずこの土地に連れ帰る」と言われた約束が20年の時を経て実現したのです。

財産をめぐる争いは昔も今も変わりません。少しでも自分が損をしないよう画策したり、取ったり取られたり、争ったり…時には、悲惨な事件にも発展します。物に固執したり、物を所有することが最優先になったりすると、必ず争いが起こります。しかし、私たちが得たもの、増やしたもの、それらは全て神さまのものであり、神さまの力が働いていて、神さまの祝福によって増やされ、満たされているのです。

ヤコブは父をだますという罪をおかしました。しかし、神さまはヤコブを見捨てはしませんでした。ヤコブが20年間、ずっと日々神さまに祈り続けていたかどうかはわかりませんが、神さまがいつも共にいてくださり、守ってくださっていることを覚えていました。ハランの地を発つ時期についても神さまの時を待ち、神さまの言葉に従いました。そして、20年間も尽くしてきたのだから…と、ラバンのものを何か持って行くことはせず、自分のものだけを持って行きました。私情や私利私欲ではなく、神さまの言葉に従ったのです。

私たちには欠点があり、何度も罪を犯します。しかし、神さまを信じて、祈り、委ねる時、神さまは、私たちを守り、祝福を与え、たとえ窮地に陥ったとしても救い出してくださるのです。

私たち人間の欲は、争いを生みます。しかし、神さまは、私たちが争い、傷つけあうことのないように、知恵を与えてくださいます。その神さまの語りかけを聞こうとせず、物や名誉にしがみつこうとしないよう、神さまの祝福に感謝して歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- この世の中の様々な争いをなくすために、私たちに何ができるでしょう？
- 神さまの守りや導きを感じたのはどのような時ですか？

8月5日（月） 創世記27章34－38節

34エサウはこの父の言葉を聞くと、悲痛な叫びをあげて激しく泣き、父に向かって言った。

「わたしのお父さん。わたしも、このわたしも祝福してください。」 35イサクは言った。

「お前の弟が来て策略を使い、お前の祝福を奪ってしまった。」 36エサウは叫んだ。

「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」 エサウは続けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか。」

37イサクはエサウに答えた。「既にわたしは、彼をお前の主人とし、親族をすべて彼の僕とし、穀物もぶどう酒も彼のものにしてしまった。わたしの子よ。今となつては、お前のために何をしてやれようか。」

38エサウは父に叫んだ。

「わたしのお父さん。祝福はたった一つしかないのですか。わたしも、このわたしも祝福してください、わたしのお父さん。」 エサウは声をあげて泣いた。

財産のある所に争いは古今東西変わりません。神は欲に目が眩むエサウより、策略のあるヤコブを選びました。ヤコブは父のもとを離れ、伯父ラバンの下で20年間働き、ラケルとレアを妻にし多くの財産を得たとの事。現代の企業でも、業績を伸ばす人材が求められています。

8月6日（火） ヤコブの手紙4章1節

何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望が、その原因ではありませんか。

平和を願うクリスチャンは戦争を忌避する事を願いますが、現代世界では武力で相手を屈服させる欲望の強い国の指導者がいます。クリスチャンとしてどう対応したらいいのか考えなければなりません。

8月7日（水） コリントの信徒への手紙1 15章10節

神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。

人は自分の家族の為懸命に働きます。その結果豊かになったとしても、社会や周囲の人達がいるからです。自分の努力も事実ですが、周りの人や社会に感謝し、それを行動で示す事が大切です。

8月8日(木) ルカによる福音書 | 2章 | 3-2 | 節

13群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」 14イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」 15そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」 16それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。 17金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、 18やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、 19こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。』 20しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。 21自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

法の原則を楯にとり、自分の権利を主張し過ぎると、争いが生じます。神の一方的な人への愛を学べば、他人に対する優しさが起こり問題解決に一步前進します。

8月9日(金) ローマの信徒への手紙 | 2章 | 5-18 | 節

15喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。 16互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。 17だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。 18できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。

日本には昔から、[可愛い子には旅させよ]と云う格言があります。若い時にグループ旅でなく、全くの一人旅で、病気/怪我やいろいろの困難に遭遇する事によって、社会の一員として、生きる知恵が備わります。イエスさまは困難や苦勞する事は宝物と教えてくれます。

8月10日(土) コリントの信徒への手紙 | 10章 | 24 | 節

だれでも、自分の利益ではなく他人の利益を追い求めなさい。

(聖書教育8月号の毎日のみ言葉8/10日に)鈴木義男についての記述があり、調べました。東北地方出身の法学者/弁護士/政治家で、太平洋戦争後、米軍GHQによって作られた日本国憲法草案の第9条に[平和]の文言を入れ、25条に[生存権]を追加する役割を果たしたと。彼は子供の時からキリスト教の精神を身に付けていたとの事です。



第19課 ペヌエルでの格闘

聖書箇所：創世記32章23～33節

主題聖句：ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」(27節)

23その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。24皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、25ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。26ところが、その人はヤコブに勝てないとして、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。27「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」28「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、29その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」30「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。31ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。32ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。33こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人ヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

先週の第18課で叔父ラバンとの問題も解決し、故郷へと帰る旅路を進めるヤコブでしたが、この先にはさらなる試練が待っていました。兄エサウの住む土地を通ることです。これまで学んできた通り、かつてエサウの空腹に付け込んで長子の権利を奪い、父イサクの老いに付け込んでエサウが受けるべき祝福を奪ったヤコブです。兄の怒りはどれほどかと、恐怖に身を縮めていたようです。

その証拠に、ヤコブはエサウとの再会の前にあらゆる手を尽くして、身の安全を図ります。まずは使いを送ってのご機嫌伺い。これにより、エサウが400人のお供を連れて自分のところに向かっていることが分かり、大きな恐れを抱きます。

そこでヤコブは家畜や従者たちを二組に分けて、片方をエサウが攻撃しても片方が生き残れるようにと図ります。攻撃されることは半ば不可避と考え、一族の壊滅だけはどうか避けようとする必死さが表れています。

ここまでした上でヤコブは必死に祈ります。

どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子供も殺すかもしれません。(32:12)

祈りの後、ヤコブはさらに手を打ちます。大量の家畜を贈り物として届け、それを運ぶ従者たちに「これはヤコブからの贈り物です、後からヤコブも参ります」と伝えるように」と命じるのです。先に贈り物が届けばエサウの態度が軟化するかもしれない、との期待からです。

このように恐怖のどん底にあっても思いつく限りの策を練るところが、正にヤコブのヤコブラしさなのでしょう。逆境にも挫けない精神力と、抜け目のない賢さを兼ね備えた彼が、もし現代社会にいたら、やり手のビジネスマンになっていたかもしれません。

さて、そんなヤコブに神さまが仕掛けたのが、思い切り肉体頼みの「格闘」だったのです。ヤコブが得意とする知略の入り込む余地は、ほとんどありません。この格闘を、ヤコブが必死に祈る姿を言い換えたものとする読み方もあるようですが、私は本当に戦った、と読みたいと思います。神さまは、モーセには燃え尽きない柴となってご自身を現わされたり、幼いサムエルには、「サムエル、サムエル」と夜中にそと声をかけられたりしています。その人、その時にあった方法で関わってくださる神さまが、少々荒っぽいにせよ格闘を仕掛けたとしても、不思議ではありません。

きっとヤコブは突然の襲撃に驚いたことでしょう。初めはエサウの手のものか！？と恐れたかもしれません。しかし徐々に相手が人ならざるお方だと気付いたようで、足の関節を外されてもなお「祝福してくださるまでは離しません」と食い下がります。この戦いは「もう去らせてくれ」と言われた神さまのギブアップ（降参）負けのようですが、実際は神を神と認め、自分は祝福を必要とする人間なのだと自身の弱さを認めたヤコブのギブアップ負けなのです。

先ほどヤコブの祈りとして32章12節を引用しましたが、続く13節にはこのように書かれています。

あなたは、かつてこう言われました。『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数えきれないほど多くする』と。』

祈りはここで終わっており、続く言葉はありません。まるで神さまの約束を言質として持ち出し、子孫の繁栄を約束されましたよね？守ってくださいますよね？と交渉しているようにも読めます。

そんなヤコブが、取っ組み合いをしながらとは言え、へり下って祝福を求めているのです。神さまを交渉相手とするような傲慢な思いは既に消え、それゆえにヤコブは実際に祝福を受けることができたのです。先ほどの祈りでは安心できずにさらなる作戦を練っていたヤコブも、祝福を受けた平安により、この先エサウと向き合うことが出来るようになります。

教会に集う多くの方は、ヤコブのような「ギブアップ負け」を経験されているのではないのでしょうか。自分の頭で理解・納得することや、目に見えた効果や利益を求めて神さまと向き合う生き方から、ただひれ伏し委ねる生き方への変化が、きっとどこかで与えられていると思うのです。今週の聖書日課のうち、17（土）の箇所が表すように、神さまはその変化を喜ばれます。

わたしは、高く、聖なる所に住み/打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり

へりくだる霊の人に命を得させ/打ち砕かれた心の人に命を得させる。（イザヤ7：15）

格闘技の選手にとってリング上でのギブアップは屈辱的だそうですが、人間が神さまにギブアップすることはむしろ喜びです。委ねた先にある平安を覚え、感謝しながら歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- あれこれ作戦を練るヤコブの姿から、どのようなことを感じましたか。
- 「委ねること」と「何もしないこと」は同じでしょうか。考えてみましょう。

8月12日（月） 創世記4章7節

もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

「怒り」は誰にとっても身近なテーマです。ストレスや苦しみを生じさせ、人間関係に支障を来すこともあります。創世記のカインのように怒りを抱えたまましていると神から顔を伏せるようになります。神と目を合わせず顔を伏せたまま、間違った歩みの中にいる私たちと神の関係を回復するためにイエスさまが来てくださったのです。

8月13日（火） コリントの信徒への手紙Ⅱ 4章6節

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

「闇から光が輝き出よ」これは神ご自身の言葉です。創世記の天地創造の「光あれ」を想起します。この神が私たちの内で輝いてくださり、イエスキリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださる。この栄光を鏡のように映し出すのは私たちなのです（3：18）

8月14日（水） コリントの信徒への手紙Ⅱ 12章7－9節

7また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。8この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。9すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

「とげ」が何を指すかは諸説ありますが、宣教の働きに大きな障害となったことは明らかです。サタンの使いと呼ぶほどの苦痛だったのでしょう。必死に取り除いてほしいと祈るも取り除かれませんでした。パウロはそのすべてを神のみこころと信じ受け入れました。恵みは十分に与えられ神の恩恵の中に置かれている自分に気づいたのです。



8月15日(木) 詩編85篇9節

わたしは神が宣言なさるのを聞きます。
主は平和を宣言されます
御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に
彼らが愚かなふるまいに戻らないように。

神ご自身が平和を宣言されます。主に従い歩む私たちに神の平安が与えられ、救いと栄光が実現すると約束が語られています。平和を願い祈るこの8月、神からのシャロームが豊かに注がれますように。

8月16日(金) コリントの信徒への手紙II 12章10節

それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

自分の弱さをさらけ出すことで周囲から信頼を得、真のつながりを築けることがあります。弱さを恥じたり隠したりせず自信をもって見せていいのです。心の痛みや傷、うめきなどの弱さの中で神からの大きな力が働くからです。弱くて折れてしまいそうなときに、共に祈りあえる友を神が与えてくださいますように。

8月17日(土) イザヤ書7章15節

高く、あがめられて、永遠にいまし
その名を聖と唱えられる方がこう言われる。
わたしは、高く、聖なる所に住み
打ち碎かれて、へりくだる霊の人と共にあり
へりくだる霊の人に命を得させ
打ち碎かれた心の人に命を得させる。

私たちの心にはどれほどのでこぼこがあるのでしょうか。でこぼこ道を平らにならすように心の中をつまずきを取り除くために、高く聖なところにおられる方が私たちのところまで来てくださり、砕かれへりくだる霊に語りかけてくださります。心の道を整えよ、シャロームがあるようにと。



第20課 ヤコブ、エサウとの再会

聖書箇所：創世記33章1～20節

主題聖句：そこに祭壇を建てて、それをエル・エロヘ・イスラエルと呼んだ。(20節)

1ヤコブが目を上げると、エサウが四百人の者を引き連れて来るのが見えた。ヤコブは子供たちをそれぞれ、レアとラケルと二人の側女とに分け、2側女とその子供たちを前に、レアとその子供たちをその後に、ラケルとヨセフを最後に置いた。3ヤコブはそれから、先頭に進み出て、兄のもとに着くまでに七度地にひれ伏した。4エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。

5やがて、エサウは顔を上げ、女たちや子供たちを見回して尋ねた。

「一緒にいるこの人々は誰なのか。」

「あなたの僕であるわたしに、神が恵んでくださった子供たちです。」

ヤコブが答えると、6側女たちが子供たちと共に進み出てひれ伏し、7次に、レアが子供たちと共に進み出てひれ伏し、最後に、ヨセフとラケルが進み出てひれ伏した。8エサウは尋ねた。

「今、わたしが出会ったあの多くの家畜は何のつもりか。」

ヤコブが、「御主人様の好意を得るためです」と答えると、9エサウは言った。

「弟よ、わたしのところには何でも十分ある。お前のものはお前が持っていないさ。」

10ヤコブは言った。

「いいえ。もし御好意をいただけるのであれば、どうぞ贈り物をお受け取りください。兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます。このわたしを温かく迎えてくださったのですから。11どうか、持参しました贈り物をお納めください。神がわたしに恵みをお与えになったので、わたしは何でも持っていますから。」

ヤコブがしきりに勧めたので、エサウは受け取った。

12それからエサウは言った。

「さあ、一緒に出かけよう。わたしが先導するから。」

13「御主人様。ご存じのように、子供たちはか弱く、わたしも羊や牛の子に乳を飲ませる世話をしなければなりません。群れは、一日でも無理に追い立てるとみな死んでしまいます。14どうか御主人様、僕におかまもなく先にお進みください。わたしは、ここにいる家畜や子供たちの歩みに合わせてゆっくり進み、セイルの御主人様のもとへ参りましょう。」

ヤコブがこう答えたので、15エサウは言った。

「では、わたしが連れている者を何人か、お前のところに残しておくことにしよう。」

「いいえ。それには及びません。御好意だけで十分です」と答えたので、16エサウは、その日セイルへの道を帰って行った。17ヤコブはスコトへ行き、自分の家を建て、家畜の小屋を作った。そこで、その場所の名はスコト（小屋）と呼ばれている。

18ヤコブはこうして、パダン・アラムから無事にカナン地方にあるシケムの町に着き、町のそばに宿営した。19ヤコブは、天幕を張った土地の一部を、シケムの父ハモルの息子たちから百ヶシタで買い取り、20そこに祭壇を建てて、それをエル・エロヘ・イスラエルと呼んだ。

7月に私が担当した第16課で父イサクに嘘をつき、兄エサウに与えようとしていた父からの祝福を騙し取り、殺してしまおうとまで憎んでいた兄から叔父ラバンがいるハランの地まで逃れからの再会の場面です。

「兄のもとに着くまでに七度地にひれ伏した。」(3節)の場面は中国の皇帝に謁見する映画の場面を思い浮かべます。日本でも、「7度参り」「七度詣」(なぬかもうで等)という言葉があるように7回というのは神さまや位の高い人に対しての拝礼の数としてその当時でもあったかと想像できます。そしてヤコブはエサウに対して神さまや位の高い人のように拝礼をして近づいていきました。ヤコブの言葉も神さまと話しているような言葉使いで話しており、むしろエサウが戸惑っているように受け取れますね。

ヤコブは31章3節で、神さまから「あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる。」との御言葉を受け、エサウのことが恐ろしくてたまらないヤコブでしたが、主の言葉を信じて故郷に戻ります。身内や友達とケンカした後に仲直りする時の気まずさや不安を思い出します。エサウは殺してやるとまでヤコブを憎んでいたのですが、ヤコブの言動、近づくまでに七度拝礼をする所や、エサウを「ご主人様」と呼び、自分を「僕（しもべ）」と呼ぶ箇所等から、その気持ちが十分に伝わります。

エサウに対しても神さまが十分に臨んで下さり、多くの恵みを与えて下さっていたことが、9節の「弟よ、わたしのところには何でも十分ある。お前のものはお前が持っているなさい。」という言葉から推測できます。この日のために神さまがエサウの心を変えて下さいました。主のご計画は必ず成就され、最後には必ず良きものとして下さることが現われている箇所ではないでしょうか。

また、この箇所は「放蕩息子」のたとえ話と通じる部分があると言えます。どちらも過去にしてしまった行いを自省する期間を与えられ、その反省を通して神さまに正しい者へと変えられていく姿が描かれています。罪を犯してしまっても、その罪を自省し、神さまへと立ち帰り、より頼み従っていく。そして、それを喜びを持って受け入れて下さる神さまがいます。その後、ヤコブはカナン地方のシケム（シュケム）に移り住み、祭壇を建て、「エル・エロヘ・イスラエル」（イスラエルの神である神）と名付けました。兄との仲直りを実現して下さった神さまへの感謝が伝わる箇所ですね。

最後に、このシケムの地は初めに主がアブラハムに現れて契約を更新した場所であり、ヨシュア記の時代には約束の地カナンを与えられたヨシュアがイスラエルの全部族を集め、皆で主に従っていくことを誓った土地にもなります（シケムの契約）。その後、北イスラエル王国建国の地として初めの首都にもなりましたが、紀元前108年、イエスさまがお生れになる前に町は破壊されたとあります。

そして現在、この地はパレスチナ侵攻の火種になっているヨルダン川西岸地区の中に……。主の平和がこの地で実現しますように祈りを合わせましょう。

～分かち合い～

- 仲違いをしてしまった人との関係を神さまに祈り、仲直りさせて頂いた経験はありますか？

今週の聖書日課

8月19日(月) ルカによる福音書15章18-24節

18ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。20そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21息子は言った。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」22しかし、父親は僕たちに言った。「急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」そして、祝宴を始めた。

18節で心の中で「私は天に対しても、あなたに対しても罪を犯しました。」と告白しようと決心した時に、(もうすでに人にも許されている。)と思わされる展開の早さです。先ず、人の心を動かすことのお出来になる主の前に、赦しをこう(悔い改める)大切さを教えられます。

8月20日(火) コリントの信徒への手紙1 13章12-13節

12わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。13それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

聖霊さまによって私たちは主を知っていますが、もちろん完全には知ることはできません。主が来られた時にハッキリと知ることが赦されます。その希望と共に、神さまは私たちが完全に知っておられるのですから、何も足掻く必要もなく感謝を持って主の前に素直に生きることの大切さを覚えます。

8月21日(水) マルコによる福音書9章50節

塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

卵焼きに入れるお塩、スイカにかけるお塩が適量でしたら味を引き立てておいしくなりますが、多過ぎたら塩辛くて食べられません。逆に塩に塩気が無かったら役に立ちません。「自分自身の内に塩を持ちなさい。」とありますので、良い塩梅の塩加減で用いていただければ幸いです。

8月22日(木) 詩編32編1節

いかに幸いなことでしょう

背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。

決め事に従えず反する行動をしてしまった時に、その過ちを犯したことを責めるのではなく赦して、尚且つ負債があるなら尻拭いまでして下さったら本当に幸いです。主は悔い改める者を大きな慈しみを持って、いつもこの様に迎えてくださることを心より感謝いたします。

8月23日(金) コロサイの信徒への手紙3章5-11節

5だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および食欲を捨て去りなさい。食欲は偶像礼拝にほかならない。6これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。7あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。8今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。9互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、10造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。11そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。

「怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。」8節b「造り主の姿に倣う新しい人を身につけ、・真の知識に達するのです。」10節
このことは国籍や住まう所、身分や貧富の差、性別年齢などの区別はありません。イエスさまが全てであって、全ての者のうちにイエスさまがいて下さるのです。ハレルヤ。

8月24日(土) マタイによる福音書6章19-24節

19「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。20富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。21あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」

22「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、23濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」

24「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

同じものを見ても(同じことに会っても)心が明るい時と薄暗くなった時では、受け取り方が全く違います。心の目がいかに大切か覚えさせられます。私たちの心にいつもイエスさまの灯火が輝いていて下さいます様に🙏

第21課 ヤコブのベテル帰還

聖書箇所：創世記35章1～15節

主題聖句：あなたは立ってベテルに上り、そこに住んで、あなたがさきに兄エサウの顔を避けてのがれる時、あなたに現れた神に祭壇を造りなさい。(1節 口語訳)



1神はヤコブに言われた。「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のための祭壇を造りなさい。」

2ヤコブは、家族の者や一緒にいるすべての人々に言った。「お前たちが身に着けている外国の神々を取り去り、身を清めて衣服を着替えなさい。3さあ、これからベテルに上ろう。わたしはその地に、苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る。」4人々は、持っていた外国のすべての神々と、着けていた耳飾りをヤコブに渡したので、ヤコブはそれらをシケムの近くにある櫪の木の下に埋めた。5こうして一同は出発したが、神が周囲の町々を恐れさせたので、ヤコブの息子たちを追跡する者はなかった。6ヤコブはやがて、一族の者すべてと共に、カナン地方のルズ、すなわちベテルに着き、7そこに祭壇を築いて、その場所をエル・ベテルと名付けた。兄を避けて逃げて行ったとき、神がそこでヤコブに現れたからである。

8リベカの乳母デボラが死に、ベテルの下手にある櫪の木の下に葬られた。そこで、その名はアロン・バクト（嘆きの櫪の木）と呼ばれるようになった。

9ヤコブがパダン・アラムから帰って来たとき、神は再びヤコブに現れて彼を祝福された。10神は彼に言われた。

「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名はもはやヤコブと呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる。」

神はこうして、彼をイスラエルと名付けられた。

11神は、また彼に言われた。

「わたしは全能の神である。

産めよ、増えよ。

あなたから

一つの国民、いや多くの国民の群れが起こり

あなたの腰から王たちが出る。

12わたしは、アブラハムとイサクに与えた土地を

あなたに与える。

また、あなたに続く子孫にこの土地を与える。」

13神はヤコブと語られた場所を離れて昇って行かれた。14ヤコブは、神が自分と語られた場所に記念碑を立てた。それは石の柱で、彼はその上にぶどう酒を注ぎかけ、また油を注いだ。

15そしてヤコブは、神が自分と語られた場所をベテルと名付けた。



今週の聖書教育誌の週題は「ヤコブのベテル帰還」です。

ヤコブは長子の特権と父イサクの祝福を、長男エサウを欺いて受けた、奪い取ったという方がふさわしいとも思いますが、それは神の御心に叶うものであったのでしょうか。そうではなかったのです。神は怒っておられたのです。彼はそのために全てを捨てて、ハランに住む叔父のラバンの元に身を置くこととなります。20年の月日を過ごし、今また叔父ラバンの元から逃げてカナンへ戻ります。そのためには兄エサウとの和解が必要でした。聖書では人が人を傷つけ、欺いて罪を犯すことは、相手が人であっても、その背後におられる神に罪を犯すことになるのです。ですから、ヤコブがエサウに犯した罪は、神に対する罪でもありました。その罪をヤコブが理解するためにも20年の時が必要であったのです。ヤコブはエサウの怒りは神の怒りであると知り、神を畏れたのです。先週に学びましたが、エサウに受け入れてもらう以外にヤコブの進む道はなく、それはエサウの背後におられる神が、ヤコブを赦し和解してくださることでありました。

ここに、現代の私たちにも大きな示唆が与えられます。私たちの信仰生活もともすれば教会生活と世俗の生活を分けていることが無意識のなかに潜んではいないでしょうか。しかし、世俗社会のなかにこそ神はおられ共に歩まれようとされています。教会のなかでは聖書の規範を守ろうとし、世俗社会では世俗のルールに流されることに悩まされるのが私たちの姿なのです。

34章でのヤコブの息子たちの暴虐な行為により、カナンの先住民の人々に大きな遺恨を残すことになりました。なぜ、彼らはそのような行為に及んだのか、妹への仕打ちに対する仕返しとしても度を越えたものであり赦されない行為でした。彼らが歯止めのきかない行為に及んだのはヤコブが信仰の原点から離れて世俗化していたために子どもたちにも影響を与えて信仰的良心よりも世俗の復讐に及んだというべきでしょうか。エサウと和解し、背後におられる神の存在を改めて知らされたヤコブでしたが自分の力でこの問題を解決しようとする意識がまだあったようにもみえます。

そこで神はヤコブに言われました。

35:1 「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のための祭壇を造りなさい。」

【口語訳】 35:1 「あなたは立ってベテルに上り、そこに住んで、あなたがさきに兄エサウの顔を避けてのがれる時、あなたに現れた神に祭壇を造りなさい。」

口語訳では悩みのなかにあるヤコブに主は「立ってベテルに上れ」と言われます。「立って」という意味は悩みの中から立ち上がれという意味です。つまり「悔い改めて罪の中から立ち上がりなさい」と言われているのです。私たちは自分の力では悔い改めることは出来ません。後悔することはできます。ですが真の悔い改めは、神の「悔い改めよ」と命じられる言葉により可能となるのです。

ベテルに祭壇を築くように神が言われたのは、「主を礼拝せよ」主を礼拝し続けなさいとの神のご意思です。祭壇を築いたヤコブの一族は世俗の偶像を取り除いて、心を新たにして神を礼拝することを誓いました。着物を着換え、偶像を捨ててシケムの近くの櫟の木の下に埋めたのです。こうして暴虐な罪を犯したヤコブの一族にも信仰回復が興されたのです。ここに神の祝福が与えられました。ベテルへの帰還は一族の信仰回復の時であったのです。

35:10 神は彼に言われた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名はもはやヤコブと呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる。」神はこうして、彼をイスラエルと名付けられた。

こうして、アブラハムにも現れた神はヤコブにも現れ、イサクがヤコブを祝福した同じ内容を与えられたのです。ヤコブはその応答としてベテルの地に石の柱を立てて油そそぎして聖別したのです。

私たちも悩み、苦しみ、悲しむときに主なる神は観ておられます。そして、声をかけてくださいます。

その御声に応答したならば、神は必ず守ってくださいます。時に世の習わしに煩わされる私たちですが「立って」主に立ち帰り、主を礼拝するならば、主なる神は私たちに祝福を約束してくださるのです。

～分かち合い～

- あなたには世の習わしで悩んでいることがありますか。

● 今週の聖書日課 ●

8月26日（月） 出エジプト記20章2-3節

2「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。3
あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

「わたしをおいてほかに神があってはならない」誰でもお父さん、お母さんは1人だけです。
私たちを愛してくださる父なる神さま。日々、たくさんの恵みに感謝致します。

8月27日（火） 詩編23篇6節

命のある限り

恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り

生涯、そこにとどまるであろう。

姿は見えませんが、いつも、あなたは私と共にいてくださいます。「恵みと慈しみはいつもわたしを追う」神さま、ありがとうございます。

8月28日（水） 出エジプト記20章4節

あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。

「あなたはいかなる像も造ってはならない」心に迷いが生じると、迷いを埋めるために違う何かを求めてしまいます。形ある何かを。それで一時的に心はおさまるかもしれませんが……。父なる神さまはもっと大きいのです。大きな愛でわたしを包んでくださいます。神さま、感謝致します。

8月29日（木） 創世記37章1-8節

1ヤコブは、父がかつて滞在していたカナン地方に住んでいた。

2ヤコブの家族の由来は次のとおりである。ヨセフは十七歳のとき、兄たちと羊の群れを飼っていた。まだ若く、父の側女ビルハやジルパの子供たちと一緒にいた。ヨセフは兄たちのことを父に告げ口した。

3イスラエルは、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった。4兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。

5ヨセフは夢を見て、それを兄たちに語ったので、彼らはますます憎むようになった。6ヨセフは言った。

「聞いてください。わたしはこんな夢を見ました。7畑でわたしたちが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました。」

8兄たちはヨセフに言った。

「なに、お前が我々の王になるというのか。お前が我々を支配するというのか。」

兄たちは夢とその言葉のために、ヨセフをますます憎んだ。

ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、兄たちは嫉妬がわきます。ヨセフは天真爛漫(らんまん)で兄たちに何でも話しました。「こんな夢を見ました」兄たちの憎しみが増します。人は気づかぬうちに、知らず知らずに人を傷つけていることもあります。神さま、気づかぬ自分をお許しください。

8月30日（金） 創世記37章9－17節

9ヨセフはまた別の夢を見て、それを兄たちに話した。

「わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです。」

10今度は兄たちだけでなく、父にも話した。父はヨセフを叱って言った。

「一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか。」

11兄たちはヨセフをねたんだが、父はこのことを心に留めた。

12兄たちが出かけて行き、シケムで父の羊の群れを飼っていたとき、13イスラエルはヨセフに言った。

「兄さんたちはシケムで羊を飼っているはずだ。お前を彼らのところへやりたいのだが。」

「はい、分かりました」とヨセフが答えると、14更にこう言った。

「では、早速出かけて、兄さんたちが元気にやっているか、羊の群れも無事か見届けて、様子を知らせてくれないか。」

父はヨセフをヘブロン谷から送り出した。ヨセフがシケムに着き、15野原をさまよっていると、一人の人に会った。その人はヨセフに尋ねた。

「何を探しているのかね。」

16「兄たちを探しているのです。どこで羊の群れを飼っているか教えてください。」

ヨセフがこう言うと、17その人は答えた。

「もうここをたってしまった。ドタンへ行こう、と言っていたのを聞いたが。」

ヨセフは兄たちの後を追って行き、ドタンで一行を見つけた。

これから、ヨセフの受難がはじまります。憎しみは、相手が立場が弱いと虐待やいじめにつながります。大きくなると人種差別や紛争に発展します。神さま、憎しみを持つ人の心を和らげてください。憎しみによって苦しむ人を助けてください。お祈りします。

8月31日（土） ルカによる福音書17章20－21節

20ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。

「神の国は、見える形では来ない。21『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」神は愛です。お互いの中に愛があるとき、そこには神の国があるのだと思います。





2024.8 成人科